
妖精の話

龍々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖精の話

【Nコード】

N4704V

【作者名】

龍々

【あらすじ】

学生がフェアリーテイルの世界で頑張るお話

天使の野郎（前書き）

御目汚ししてすみません^^;

初めて書いた転生物。

うまく書けるか不安120%ですが頑張ります。

天使の野郎

ここはどこだ……？昨日学校から帰って寝て、当たり前だけどそこからの記憶が無い。

辺り一面、真っ白け。つーか何も見えねえ。

驚きの白さ……なんてボケをかます暇も無く、俺の目の前に女の人
が現れた。

「あんたは誰だ？」

「私？私は天使、エンジェルよエンジェル」

は？何言ってるの？……まあそれを否定するなら今の状況を先に否定しなきゃ……みたいな事を某ゲタ帽子が言ってた気がする。

「えーと天使？今俺どうなってるの？」

「あなたは死んじゃったの」

何だよそれ適当な事言つなよ……第一俺は死んだ記憶なんかねえ。

「ちょーっとこっちのミスでね……あなたの死期を速めちゃったのよ」

ミスって何だミスって……そんな理由で人の死期速めんな！

「で、お詫びにあなたを漫画の世界に転生させることにしました」

「！」

軽いなオイ！まあ漫画の世界に転生って言うのは嬉しいけど。

「で？どこの世界に転生させてくれるんだ？」

「フェアリーテイルよ」

よっしゃ！俺の好きな漫画だ！でもよ……

「そこの世界に入るには魔法が無いと駄目だよな？」

俺がそういうと天使は少し考え、ある提案を出してきた。

「こつちが考えんの面倒くさいからさー、なんでも使える、で良いね、ハイ決定！」

ちょ、待てよ、何だよその理由！！

俺は彼奴に文句を言おうとしたが、既に天使の姿は無く、それどころか俺が立っている場所も変わっていた。

ギルド・妖精の尻尾の目の前に俺はいた。

ちっ、逃げられた……

俺はそう思いながらも、ギルドの扉を開ける。

心なしか目線が低い。背が縮ん出るって事は……

「あのやろつ・・・」

俺は若返っていた。

しばらくするとギルドの魔道士達がザワザワと騒ぎ始め、奥から小さな爺さんがやってきた。

まあ、俺も若返ってるから小さいだけだね！ハハハ！！

そう、妖精の尻尾のマスター、マカロフだ。

「あの、このギルドに入りたいんですが」

「いいよ、よろしくね」

軽っ！！良いのかそんなんでも……

「ほれ、いつまで突っ立っておる。こっちへこんかい」

俺はマスターに引っ張られ、カウンターの所に来た。

「では、お前さん名前は？」

えーと名前名前　　って思いだせねえ！？

とりあえずパツと思ひ浮かんだ名前、？レイド？って名前を名乗った。

「レイドです」

フム、とう頷くとマスターは棚からスタンプを取り出し、俺の右腕にポン、と押した。

オーケーオーケー、ここまで順調。

俺は晴れてフェアリーテイルの一員になった。

天使の野郎（後書き）

どうでしたか？これから少しずつ更新していく訳ですが。

ツッコミ所が多くなる予感がしますw w

感想等、気が向いたらでいいんで、送ってくれると嬉しいです。

ビッリビッリにしてやんよ（前書き）

タイトル明らかにネタですね（笑い）
今回初任務です。

レイドが悪い奴に御仕置きします

「ビッリビッリだしてやんよ」

よう、俺の名前はレイド！超適当な天使のおかげでフェアリーテイルの世界に転生しちゃったよ。

あれから色々あって、今は原作開始の数年前という事が分かった。つまりナツやエルザの小さい頃、という事だ。

「おい！レイド！勝負しようぜ！」

まーた来たよ……皆もお分かりだと思いが声の主はナツだ。

毎日毎日こうやって勝負を申し込んでくるんだよ。

俺にも仕事があるんだけどな……

だから俺はいつも仕事が終わったらな、と行って逃げている。

「さて、仕事に行ってくるか……」

「待て！私も一緒に行く」

エルザだ。

俺は毎日仕事に行く時、ナツ、グレイ、エルザ、ミラの誰かと一緒に行く。

まああっちからついてくるんだけどな。

新入りの事が気になるのかね？

「おう、報酬はいつも通り山分けな？」

今回の任務は盗賊退治、西の山にアジトを構えているらしい。

山についた俺とエルザは盗賊のアジトを探す。

「ん？何だ餓鬼共、ここは遊び場じゃねえぞ？ゲヒヒヒ」

どういう笑い方だよ……まあ風貌からしてこいつは盗賊に間違いない。

「エルザ！」

「ああ！換装・黒羽の鎧！！」

黒羽の鎧は攻撃力をアップさせる鎧だ。こんな下っ端を倒すには分けないな。

盗賊はと言うと、魔法を使うとはいえ、相手は子供と油断しているらしく、相変わらずゲヒヒヒと笑ってやがる。可哀想なやつだ……

「ぎゃああああー！！」

ほら見る……一瞬でやられた盗賊は不恰好にドタバタと逃げようとする。

馬鹿だな……これを尾行すればアジトなんか一発で分かるぞ？

俺たちはコソコソと盗賊を追う。

逃げた先にはやっぱり盗賊のアジトがあった。

そしてアジトの入り口に……

「ファイヤー!!」

熱々の炎をぶちかましてやった。

あ、死なない程度にしといたから安心しろよ？

中からドタバタという音が聞こえ、それが止んだところに、中を覗くと、一人だけ、盗賊が起き上がった。

「テメエ！何しやがる!？」

「何って、お仕置きだよ、おっさん」

「ぶっ殺……!!」

「スパーク!!」

ビリビリビリと盗賊は感電し、その場に倒れこんだ。

はい、任務完了っつと。

「お前、容赦ないな……」

いやいや、エルザに言われたくないんだが……

とりあえず、今日はもう帰って寝るかな。

俺たちは丸焦げになった盗賊たちを縛って、報酬を貰ってそれぞれの家に帰った。

ピツリピツリにしてやんよ（後書き）

うん。

主人公の魔法：へたこいた感が…（苦笑）

ご感想等、ありましたらご気軽にどうぞ。

喧嘩？いや、勝負だZ E (前書き)

戦闘描写が下手な自分に涙。

喧嘩？いいや、勝負だZ E

俺は今、ひたすら殴り合いの蹴り合いをしている。

え？誰と？ナツだよ。俺はついにナツと勝負をしてやることにした。

「火竜の……」

ナツが拳に炎を纏わせ、こちらに殴りかかってくる。

「鉄拳！！」

だが俺はそんな単純な技は食らわないぜ！

「スパークアロー！！」

俺は矢の形をした電気の塊をナツに向け、飛ばす。

しかしナツはそれをヒョイヒョイ、と避ける。

お前竜じゃなくて猿だろ……そう言いたくなる程速い。

「オラア！！」

「おっと」

いつの間にか目の前にいたナツが俺に殴りかかってきた。

それをパシッと手の平で受け止め、両手に電気を走らせる。

「あああ！」

バタッ

やべえ少しやりすぎた……

「おい大丈夫か？」

「うおおおー！」

うおっ！起きやがった！

「火竜の……咆哮ー！」

ナツは俺に向け炎のブレスを放ってくる。

こりゃあちよつとやばいかもな……でも。

「スパークシールド！」

俺は電気の盾でナツのブレスを防いだ。

しかし、次の瞬間、俺の頭に激痛が走った。

ナツが後ろに回って殴ってきたからだ。

「オラァ！」

もう一発、ナツは俺に殴りかかってきた。

「電光！」

俺は体を発光させてナツの目を眩ました。

そして次の瞬間……

ドゴォ！

俺は上からナツの頭を思いっきり殴りつける。

「グ……そつちだ！」

うお！ナツの野郎、そういえば鼻が効くんだったな、見えもしねえのに殴りかかってきやがった。

「火竜の煌炎！！」

「ぐっ！！」

やばい……押されてきた。

まあ、相手は仲間だから別に負けてもいいんだが……意地と言っ者があからな。

「ぜってえ負けねえ！」

「俺だつて負けるかあ！」

俺達二人の魔力は既に空っぽだった。

だから二人共自分の拳を互いの頬に拳を減り込ませる。

どこのスポ魂漫画だよ！と言っつつコミはしてくれな……

俺は膝をつき、頬の痛みを耐える。

しかし段々力が抜けてきて……

バタッ

今倒れたのは……ナツだった。

ナツが倒れた後に、俺はその場に倒れた。

本当スポ魂クセエ……

喧嘩？いや、勝負だZ E（後書き）

今回レイドはナツに勝ってますが、オリ主最強にはしないつもりです。

まあ、魔法は反則的ですけど。

感想お待ちしています

原作開始（前書き）

原作開始です。

台詞とかは覚えてないので、それっぽく喋らせる事にしました

原作開始

転生から数年後、ようやくと原作に入った。

今俺とナツはハルジオンにいる。

本来俺はここにいる意味無いんだが、暇だから、という理由で付いてきた。

もちろん、今は竜が街中にいるはずないじゃねえか、というツッコミはしない。

ルーシイに会えない危険性があるからな。

そして俺たちの歩く方向に人だかりが出来ている。

あれは……（にやり）ちょっと悪さしてやろう。

ナツとハッピーが人だかりの方へ「イグニール！」といいながら走っていく。

馬鹿だろあいつら……？あーあ、女の人達にフルボッコにされてるよ。

俺はナツの方に走って行って、ひとまず女の人達に謝る。

そして偽サラマンダーの耳元で……

「本当にすいませんねえ紅天フロミネンスのボラさん？」

うん、今俺めっちゃ嫌な奴だな。

でも自覚してるから大丈夫だ問題無い。

「な……！」

偽サラムンダー、ボラは最初こそ驚いた顔をしたがすぐに落ち着きを取り戻し、その場から去って言った。

さてと、次はルーシイに接触と行くかね……

「ありがと！あんた達のおかげで助かったわ！」

俺たちはルーシと共に食事をしている。

ああ、無論女性に飯を奢ってもらうなんて事はしねえ。

全て俺の奢りだ（真面目に依頼をこなしてて良かった……）。

俺はルーシイが喋りだす前に、自分とナツの名前と、所属しているギルドの名を名乗っておく。

「そついえば自己紹介がまだだったな？俺はレイド。こつちはナツだ。俺たちフェアリーテイルっていうギルドの魔道士なんだ」

俺がそついうとルーシイは驚いた顔をした。

「フェアリーテイルってあの！？」

「そつだ……っていつまで食ってんだよナツ！」

「もっごもっごもっごんもっごもっご」

何いってんのか分かんねえよ……

俺たちの様子を見たルーシイは何故か腹を抱えて大爆笑をしている。

「あ、所で……フェアリーテイルってどうやって入るの？試験とかいるの？」

「別に？マスターとかにあつて、スタンプ押したらハイ、完了だ。」

俺がそういうとハッピーも「あい！猫でも入れるいいギルドだよ！」と補足をする。

ルーシイは良かった、とばかりに溜め息をつき、何かを言おうとしている。

まあ、大体予想は出来るけどな。

「フェアリーテイルに入りたい……ってか？」

「うん！お願い！マスターに紹介してくれる？」

紹介されなくても、あのマスターなら即了解すると思うぞ？

そういう訳で、俺たちはルーシイと一緒にマゲノリアにあるギルドに帰っていった。

……その前にボラとその船をメッタメタにしてやったんだけどな！
イエアー！

原作開始（後書き）

台詞が多くて分かりにくい！と言う方ごめんなさい。

もう少しで主人公の性格が固定しそうです。がんばります。

ご感想等、お待ちしております。

BOYOYO・N(前書き)

ここから少しずつ原作崩壊していきます。

あくまでもレイドが変えられる部分だけ、ですが。

BOYOYO-N

ルーシイがギルドに入ってから二日め、ルーシイは俺やナツとチームを組む事になった。

俺は元々ナツとはチームじゃ無かったんだけど、原作に入りたいから、入れさせてもらった。

ルーシイとナツのチーム結成、つまりエバルー屋敷に潜入〜つつ〜依頼に行くってことだ。

もちろん、ルーシイにはメイド姿にはさせない。俺はそっちの人間じゃあ無いからな。

カービィ・メロンと話をした後、俺達はエバルーの屋敷内へ潜入する。

そして、すぐにメイド達に見つかる。

ホント、エバルーってどんな美的感覚してんだ？

とりあえず俺とナツは不細工なメイド達を冥土に……ゲフン、それぞれの魔法でやっつける。

そしたら世紀末覇者、もとい精霊バルゴが俺達に襲い掛かってくる。

「お仕置きですー！」

マジかよ……バルゴが俺達に向かってダイブしてきた。

俺はすぐさま、上から迫ってくるバルゴに対し、魔法を放つ。

「インパクト！」

要は衝撃波だ。こういう単純な技ってつまないんだよな。

そろそろ必殺技とか欲しい・・・そうだ！

「水星！」

俺は元気玉よろしく自分の真上にエネルギー弾を作り出す。

唯一つ違うことは色が蒼いという事だ。

ドオオオン！

「あーあ、水びだしじゃねえか」

「あい！後先考えなよ！」

「やっぱりレイドもフェアリーテイルの一員なんだなあ……………」

酷い言われようだな…………敵を倒したんだから良いじゃねえか。

さて、DAY・BREAKとか言う本を探しに行きますかね。

「ほら、何してんだ行くぞ」

俺は二人と一匹にそう促すと部屋を風潰しに調べていった。

そして、ついにお目当ての本を見つけた。

「あー！これってケム・ザレオンの！？」

「驚くのは後にしろ！それを持って逃げるぞ！」

俺がそういうと突然地面が盛り上がってきた。

「ボヨヨーン！そんなことはさせ……」

「黙れ、スパーク！」

エバルーはまるで漫画みたいに目を飛び出して（いや、漫画の世界
なんだけどさ（ぎゃあああ、と悲鳴を上げながら、感電している。
うん、醜いな。

そうこうしている間に、ナツ、ハッピー、ルーシィはこの部屋から
逃げ出し、俺もすぐに二人の後を追っていった。

「ボヨヨーン許さん、許さんぞお！」

醜いおっさんがそんなことを呟いているという事も知らずに……

BOYOYO・N（後書き）

次回に続きます。

ちなみに主人公視点の小説なので、ナツやルーシィの考えとかは入
れません。

そういえばハコベ山の話を忘れてました。

いまさら戻れないので、諦めましょう、そうしよう。

頑張りますんで感想とかくれたら嬉しいです

BOYOYO・N? (前書き)

今回台詞が多いです、内容が分かりにくいと思う方、迷惑をおかけします。

BOYOYO・N?

俺達は屋敷から抜け出そうと、何故か下水道を走っていた。

微妙に原作どつり進んでるな。

「ところでルーシィ、壁に体とかけないように気をつけるよ？」

「え？どうして？」

「さっきのおっさん、土潜の魔法使う見たいだからな、壁の中か出てきたら堪ったもんじゃねえ」

俺がそう注意するとナツ、ルーシィ、ハッピーの二人と一匹が俺のことをガン見して来た。

え？何、もしかして俺、怪しまれてる？

「すごいなお前……」

え？

「あい！すごい分析力だよね！」

いや、原作知識だよ……

「ちよつと見直したかも……」

え？今まで俺見損なわれてたの？ヤベエ、どうしょ。

「とりあえず、外に出るぞ！」

そう、醜いおっさんが追いかけてこねえ内に。

「ボヨヨンそんなことはさせ……」

「黙れ、スパーク！」

あれ？何かデジャヴ……まあ、そんなことは措いとしてだ！

このしつこくて醜いおっさんをどうしてくれようか？

とりあえず、スパーク！

「アババババ……！」

どういふ感電の仕方だよ……とりあえずバルゴを出される前に打ちのめしておく。

あれ？そういえば原作ではナツはどっかの部屋でバルゴと戦ってたんだっけか？

それより、そろそろ止めねえと死んじまうな、こころで止めとこつ。

エバルーからプシュー、という音と共に肉が焦げた匂いがする。

ヤベエ、死んだか？

「ボヨ、ヨ……」

うん、大丈夫だった、良かった良かった。

……ああ、なんかルーシイがドン引きしてる。

だって相手は悪者だぜ！？こんぐらい許容範囲だろ！？

まあ、悩むのはこれぐらいにして……

「さ、帰るか！」

その時の俺のスマイルは何よりも輝かしい物だった。

後は帰る前にカービイさんに本の事話して、そんで父親の思いを伝えて、そしたら晴れて任務完了だ。

その夜、俺は寝るわけでもなく、かといって特に動く事も無く、ただボーっとしていた。

「なんか……」

ずいぶん離れたところに来たなあ。

俺は特に意味も無く、掌をグツパ、と動かす。

「まあ……いいや」

考えるのはまた今度にしよう！次に原作に関われるのはララバイの事件か。

俺はそう考える内に眠くなってきた。

……寝るか。

BOYOYO・N? (後書き)

レイドも何だかんだ言って、色々悩んでいます。

さて、次回からはエリゴールの話ですが、以前にもお話したとおり、オリ主最強にはしませんので、レイドが圧勝く何てことにはさせません。

まあ雑魚達には圧勝しますけど・・・

感想等、お待ちしてますんで、気が向いたら送ってみてください

デストロイ（前書き）

鉄の森編開始です。

デストロイ

さて、今俺はナツ、ルーシイ、グレイ、エルザ……と、ハッピーと共に汽車に乗っている。

都合よくエルザは俺にも鉄の森を止める協力を要請してきた。

ま、過去に一度、エルザと勝負して勝ってるしな、頼まれても不思議じゃあ無いな。

今勝負したら俺絶対負けるけど……だってエルザS級魔道士だし。

「ウプ……気持ち悪、オエ」

オイ！こっち向いて吐くな！俺は慌ててナツの首を反らせる。

するとナツの首からゴキ、と言う音がして、ナツは気絶した。

大丈夫……だよなあ？ああ、また、ルーシイに引かれた！そしてグレイは大爆笑し、エルザは原作みたいに腹をどつこうとしたのか、拳を構えていた。

「さて、そろそろ話を始めよう」

エルザは鉄の森とララバイの事について話し始める。

俺はというと、すでにそのことを知っているので、聞いている振りして、新しい魔法の事を考えていた。

その魔法の事は後で話すとして……エルザ達が汽車を降りようとしている。

俺？俺はカゲヤマと接触するために、あえて寝た振りをしてる。

エルザたちは俺とナツに気付かず、電車を降りる。

さつてと、カゲはまだか？

「ねえ、妖精^{ハエ}の二人？」

ナツはまだ酔いに苦しんでる為、俺が一人で迎え撃つ。

「誰だ？俺たちをハエ扱いする馬鹿野郎は？」

今、俺と同じギルドにいる、妖精の尻尾の皆は漫画のキャラじゃねえ。

今そこに生きる人間だ。

それと同時に俺の大事な仲間だからな。

自分の事言われたのもムカつくが、仲間の事言われるのも、同じくらいムカつく。

そんな奴には俺の新技の実験台になってもらおう。

「ん？違っの？」

「違うに決まってるだろ！マジック・インデックスフィンガー！」

これは一刺し指の先から炎や氷、雷などの魔法を飛ばす魔法だ。

一点集中して攻撃してるから、攻撃範囲よりも攻撃力に期待できる。

よし、これで俺の持ち技は水星、スパークアロー、そしてマジック・インデックスフィンガー、略してMIFの三つだ。

補助系の技も考えとこっかな？

そうこうしている間にカゲは電車の外に吹っ飛んでった。

あ、ミスった。捕まえれば良かったな……とりあえずナツを連れて外に出よう。

俺は窓に脚を掛け、脚に力を入れる。

とう！飛行魔法、エーラ！俺はエクシードが使う、空を飛ぶ魔法をパクって汽車から飛んでいく。

ナツの酔いがさらに激しくなっているが、気にしない、気にしない！

「レ、レイド!？」

グレイが魔道四輪車の上から驚いたように俺を見る。

そりゃあ俺が猫と同じ魔法使ってるからな。

俺は魔道四輪車の上に華麗に着地して、その場に座る。

うわぁナツの目が死んでるよ……今度から酔い薬でも飲んでけ。

「しょうがねえな……トロイア！」

今度はまだ見ぬウエンディから魔法をパクる。

すると見る見る内にナツの顔色が良くなった。

「うおー！助かったー！」

「うるせえぞナツ！もう一生乗り物によってるよ！」

「あぁん？やんのか！この氷野郎！」

「このクソ炎！単細胞野郎！」

「うるせえ！喧嘩するなら他所でやれ！」

俺はその言葉と共に、二人の頭同士を思いっきり打ち付ける。

二人の頭にタンコブが出来、プシュ〜という音を立てている。

今、この車はオシバナ駅に向かっている。

先ほど、鉄の森が駅を占拠したという情報があったからだ。

エルザは息を切らしながら魔道四輪者を走らせる。

「代わってやるうか？」

「いや、大丈夫だ！」

「全然大丈夫じゃねえだろ、無理すんな、エルザにバテられたら俺たち困るんだっつーの、とっとと代われよ」

俺はちよつとイライラしながらエルザに話しかける。

「そうだな……分かった」

それをエルザはどう受けとったのか、微笑を漏らしながら、STEPラグを外し、魔道四輪車の運転を俺に代わる。

さて、飛ばしますかね……

デストロイ（後書き）

何故かエルザとレイドがいい感じに・・・

僕としてはエルザフラグ立てるつもり無いんですけど・・・

感想等、ありましたらお気軽に送ってください

火と風と転生者（前書き）

キャラ達を崩壊させない様に喋らせるのってすごい大変です。
だからキャラの台詞はほとんど技名だけです。

火と風と転生者

俺達は今エリゴールが占拠した場所、オシバナ駅にいる。

エリゴールはと言うと、原作通り、クローバーの町へ向かって行った。

もったも、それを知っているのは俺だけだが……

俺達がオシバナ駅の中へ突入すると、大勢の鉄の森の下っ端が待ち構えていた。

するとエルザの指示により、俺とナツとグレイはエリゴールの野郎を探しに行く。

そして……

「すっげえ……」

俺は魔風壁の前にいる。

さて、これをどう、取り除くか……

ルーシイが来るまで待ってみようか……原作通りならハッピーがバ
ルゴを持っている筈だしな。

三十分、俺が魔風壁の前で待機していると、ナツたちが来た。

「うわ！何だよこれ！」

ん？原作ってこういう風に喋ってたっけか？まあいいやとりあえずこれをどうにかしよう。

「うーん、穴でも掘れば下からいけるんだけどな……」

俺がわざとハッピーが思い出すように言った。

すると案の定、ハッピーが、あ！と声をあげ、ルーシィに駆け寄った。

ハッピーがルーシィに処女宮の鍵を渡し、ルーシィがバルゴの姿に驚き……

うん、ここら辺原作通り。

さて、俺達はバルゴが掘った穴を通り、魔風壁の外に出た。

ナツはハッピーと共にエリゴールの元へ向かった。

「じゃあ俺も……」

俺も本日二回目のエラーでナツ達の後ろをついていく。

「なあレイド」

「何だよ？」

「勝つぞ……」

「当たり前だ」

俺達は簡単な会話を済ますと、全速力でエリゴールの元へ向かう。

10mぐらい先にエリゴールが見え、ハッピーの魔力が切れるとナツは地面に着地した。

「ぶっ飛ばしてやんよ……」

ナツはそう言って、拳を構える。

俺はというと、ナツの隣で腕を組んで立っている。

格好付けすぎか？まあいいや。

戦闘開始。

火と風と転生者（後書き）

しまった・・・原作の会話とかほとんど覚えてない・・・
でも一々本見ながら打つの大変ですし・・・どうしましょう？

まあ、ほとんどレイドの心の声が文の大半を占めてますけど・・・

感想お待ちしています。

怒り（前書き）

エリゴールとの戦闘です。

一方的にレイド達の勝利・・・にはならない筈です。

怒り

俺は今、ナツと協力してエリゴールを倒そうとしている。

エリゴールは鉄の森のエースなだけに、その強さは半端ねえ。

これから原作通りに進んでっいたらこいつ以上に強い奴が出てくる。

そう考えると正直ゾツとする。

「火竜の……鉄拳！」

「雷星！」

ナツが火竜の鉄拳を放った後、俺はエリゴールの後ろに回りこんで雷の弾を放つ。

だが奴は風の魔道士だけあって、動きは非常に速く、俺達の攻撃を難なくかわした。

そしてエリゴールは宙に浮き、小馬鹿にするようににやりと笑う。

「調子に乗んじゃねえ！サンダーダッシュ！」

俺はエリゴールの頭上に素早く飛び、雷を纏ってエリゴールに体当たりする。

だが、エリゴールは咄嗟に暴風衣で防御する。

俺の体に激痛が走る。

それはまるで鋭利な刃物で何箇所も切り裂かれる様な痛みだった。

俺達はまだ、一度もエリゴールに一撃も与えられないでいた。

それは何故か、エリゴールの強さが原作より上だったからだ。

たしか原作では僅かながらも、ナツがダメージを与えている筈だった。

俺がこの世界に来た事で何かが狂っちまったのか？

でも今はそんな事は関係ねえ、ムカつくから潰す。

それだけだ。

「水星！！」

俺は力を込めて巨大な水の弾をエリゴール目掛けぶっ放す。

それは暴風衣を突き破り見事に彼奴にヒットする。

そして……

「痺れやがれ！雷星！」

エリゴールの濡れた体には、電気が良く通る。

エリゴールは感電し、それが止む頃には肩で息をしている常態だっ

た。

そこをナツが止めとばかりに火竜の煌炎を繰り出す。

「そんなもん……喰らわねえよ！翠緑迅！！」

「ナツ！危ねえ！」

……咄嗟の判断だった。

俺はナツに向け勢い良く水流を発射する。

ナツはエリゴールの翠緑迅から逃れ、エリゴールの攻撃は虚しく宙を切った。

そして俺は電気マジック・インデックス・フィンガーのM I Fでエリゴールの腹を打ち抜く。

少量の血を吐いたエリゴールは地面に着地し、また血を吐く。

「ち……これまでかよ」

捨て台詞を吐いたエリゴールは立ったままふら付き、線路の外側、つまり崖の下に落ちていった。

「終わった……」

俺は思わずそう呟く。

「まだ終わってねえだろ」

ナツの言葉に俺はハツとする。

そう、まだララバイが残っていやがった。

しかもだ、ナツは知らねえが、あれからは巨大な化けもんが出てくるんだ。

即急に処分なり封印なりしねえとな……

「おーい！二人共！大丈夫か！？」

おお、いいタイミングだ！丁度エルザ達がカゲヤマと一緒にやってきた。

……カゲの野郎を見張ってねえとな。

「お前達良くやったな！」

「本当！同じ私達と同じ人間とは思えないわ！」

「ルーシィ……それは褒めてんのか軽蔑してんのかどっちだ？」

エルザ達が俺達の労をねぎらっている内にカゲヤマがララバイに手を伸ばす。

それを見ていた俺は破道の四さながらに指先から電撃を放つ。

「なぐにしてんのかな？カゲちゃんよお？」

「レイド、それは悪役の台詞だぞ」

グレイ……今は黙っとけ？

「傷の手当までしてやったのに恩を仇で返すたあどういうことだ、ああ！？」

今の俺まるでチンピラみたいだな……でも怒るからには徹底的に、だ。

「いいか！？お前を生かしてるのはなぜだと思っ！？お前まだ、エリゴールよりはマシな奴だからだよ！わざわざ悪い奴になろうとすんな！馬鹿野郎！」

「……！！」

「おい！なんとか言えよこの野郎！」

「おい、レイドそこらへんで止めといたほうが良い。もう十分だ」「エルザに止められて俺は冷静になる。」

う…柄にも無く怒鳴りすぎたか？ルーシイだけで無く、ここにいる全員が引いてるよ……

「と、とにかく！これから、牢の中でしばらく反省してる！」

……俺も今反省してるから。

「ハイ……」

カゲヤマはすっかり大人しくなり、心なしか体を震わせている。

『……この腑抜けめ！こうなったら、わしがが直接相手を食らうてやろっ！』

マジでか！？場所は違っが怪物登場かよ……しくつたな……

『お前らの魂をな！』

笛の中から黒い煙がモクモクと立ち込め、禍々しい顔をした、巨大な怪物が線路の外側に現れた。

第二R開始だ。

怒り（後書き）

レイドの説教、というかなんというか…

台詞を考えるのに少しだけ苦労しました（汗）

感想等、お待ちしております

場所は違えど敵は同じ（前書き）

今回はいつもより長いです。

そしてレイドが頭を使います。

どうぞ御覧下さい。

場所は違えど敵は同じ

うわぁゼレフ書の悪魔って漫画で見るよりでけえな。

さて、あの化けもんが余裕ぶっこいて笑っている内に攻撃開始とい
くか。

っとその前に……

「ナツ！これでも食っとけ！」

先ほどの戦いで魔力、体力共に減っているだろう思われるナツに炎
の塊を投げる。

「うお！サンキュー！」

ナツは息と共に炎を吸い込む。そして口を拭いたナツは「うおー！
燃えて来たー！！」と声高々に咆える。

俺？俺の魔力の消費はしょうがねえからそのまんまだ。

「火竜の……咆哮！！」

俺の炎の力も加わり、ナツは特大のブレスを吹く。

おい、せつかくの魔力を空にする気か？

俺はそう思いながらも特大の水属性のMIFを放った。

水は水圧が強いと鉄にも穴を開けるっていつからな……

案の定、化物の腹にドデカイ風穴が開いた。

『ぐあああ！己、小癩な！』

なんか台詞に雑魚臭漂ってんなあボスなのに……

『これでも喰らええ！』

化物は口から火炎を放ってきた。

こんな技ねえだろ、やっぱエリゴール同様パワーアップしてんのか？

「アイスメイク・シールド！」

おお、ナイスだ 그레이！さすが妖精の尻尾一の造形魔道士だ！

氷の盾は彼奴の吐いた火炎を糸も簡単に防御する。

そして何故か 그레이をナツが蹴飛ばした。

「てめ！何すんだクソ炎！」

「お前こそ、俺の飯を！」

ああ、なるほど……でもな、ナツ、あんな炎食ったら腹壊すぞ？

「天輪の鎧・循環の剣！」

ナツとグレイが喧嘩をしている内にエルザが鎧を換装し、周りに浮いている複数の剣で化物を連続で切り裂く。

『そんな物おお！』

化物、もといゼレフ書の悪魔は体を硬くし、エルザの攻撃を防ぐ。

こんなの技も追加されてんのかよ……

それにしても、だ。

ナツのプレスも、俺のM I Fも奴には効いた。

つまり遠距離攻撃、ゲーム風になら特殊攻撃だ。

そしてエルザの剣の攻撃、つまり直接攻撃は効かなかった。

と、いうことは、？この？ゼレフ書の悪魔は火や電気、氷などの特殊攻撃が弱点、という訳だ。

そうとわかったら……

W M I F、俺は両手の一刺し指から、それぞれ炎、雷の魔法を放つ。

奴にぶつかる直前で炎と雷は混ざり合い、大きな爆発を生み出す。

するとゼレフ書悪魔の片腕が吹っ飛んだ。

これだけでも片腕だけかよ……

俺は内心で舌打ちをし、ナツとグレイに目をやる。

ナツは炎の滅竜魔法、グレイは氷の造形魔法、炎と氷……そうだ！

「おい！ナツにグレイ！お前ら協力して交互に魔法を放て！」

「ああ？こいつと協力だあ？」

「こつちからお断りだ、氷野郎！」

いがみ合っている二人を見て俺は溜め息をつく。

「……やれよ？」

俺は笑顔で二人に言った。

その時の俺の笑顔はどんなに神々しいものだったのか見当も付かない。

なぜなら普段喧嘩ばかりの二人が素直に俺のいう事を聞いて魔法を使ったからだ。

炎、氷、炎、氷……

物体や物質は急激な温度の上げ下げを繰り返すと、急激な温度の変化に耐え切れず、脆く崩れやすくなる。

その原理を利用してゼレフ書の悪魔の防御力を最低まで下げる、という作戦だ。

『ぐうう！！何を企んでおる！？人間共おお！？』

よし、奴はまだ気付いていない。

予定通り奴の体は崩れ易くなっている。

「エルザ！黒羽の鎧で奴を攻撃しろ！」

「分かった！換装！黒羽の鎧！これでどうだ！」

エルザは線路を出ると下は崖という事を忘れ、ゼレフ書の悪魔に突っ込んでいく。

『ぐああああ！？おのれ、人間共めええ！！』

エルザの攻撃を受け、叫び声を上げたゼレフ書の悪魔は音を立てて崩れていった。

崖に落ちそうになったエルザはというと、ちやーんと俺が本日三回目のエーラでキャッチした。

「だ、大丈夫か？」

「あ、ああ・・・」

俺はエルザを線路まで連れ戻し、エルザを下ろすと肩をぐるんと回す。

「すまない、重かったか？」

「いや、全然？！して言えば鎧の分が重かったかな」

よし、これなら傷つける事は無いはずだ。

エルザが鎧着てて良かった……

さて、俺達がゼレフ書の悪魔を倒した後、いつの間にか回りにはギルドマスターの爺さん婆さんがパチパチと拍手をして来た。

まいったな、照れるじゃねえか。

「わゝ凄いわぁ……レイドちゃんとエルザちゃん！久しぶりねえ」

青い天魔のギルドマスター、ボブが近寄ってきた。

正直寄らないで欲しい……

「どつじゃ！家の魔道士達は！凄じやろう！！」

家のマスターは周りのモブに俺達の自慢をしてる。

ここら辺なら何も壊れる心配も無いし、安全に終われるだろう。

俺達は他のマスターたちに労を労われた後、俺達の家、ギルド・妖精の尻尾へ帰っていった。

場所は違えど敵は同じ（後書き）

今の所、今回が一番の原作崩壊だと思います。

そして長い・・・

ご感想等ありましたら、お気軽にどうぞ

喧嘩？いいや、勝負だぜZ E・現在バージョン（前書き）

ナツとレイド、再戦です。

決着はいかに？

どうぞ御覧あれ・・・

喧嘩？いいや、勝負だぜZ・E・現在バージョン

鉄の森巻が巻き起こした事件を解決後、ナツとエルザは妖精の尻尾の前で勝負をしていた。

ああ、そういえば事件の前にそういう約束してたな……

今のところ互角に戦っていて、この後、蛙人間が勝負を邪魔するはずだ。

……ホラ来た。

ああいう種族なのか？レイブでいう亜人ってどこか、それともテイクオーバー？うーん……

そうこうしている内にエルザがカエルが連れて来た兵士達に拘束されて、そのまま連行された。

んで、この後ナツが暴れる……と。

暴れるナツを皆が宥めながらギルド内に連れて行く。

心配しなくても大丈夫だと言っのにな……

その後、俺は皆に自分の思っていることを話した。

もちろん、何故知っているんだ、と怪しまれないようにだ。

「じゃあ何だ、エルザは形だけの逮捕、って事か？」

ナツはまだ、興奮しながらも俺の話聞いてる。

「そうだ、あと数時間したら帰ってくんじゃねえか？」

その後、俺の話した通り、エルザは何事も無かったかの様に帰って来た。

もちろん、ナツは勝負のやり直しをしろ、とエルザに詰め寄る。

しょうがねえな……

「ナツ、俺が勝負してやるから落ち着け！」

「本当か！？よし、早速勝負だ！」

俺達はギルドの前で向かい合う。

皆はエルザの時のようにどっちが勝つか、とういう賭けをしている。

ちなみに、俺5、ナツ5の互角の予想だ。

「絶対勝つ！」

やれやれ、若いのは元気だ……え？俺も若いじゃないかって？いや、転生前も入れると、俺は二十超えてるぜ。

この世界の年齢は十六だけだな。

そう、考えている内にマスターが戦闘開始の合図をする。

それと共にナツが両手に炎を纏わせながら突進してきた。

俺は雷の魔法で盾を作る。

それに当たる寸前でナツはピタ、と動きを止め、上に跳んだ後ナツは全身を発火させる。

そして俺の真上から攻撃して来た。

「火竜の……剣角！」

「ち……避けられねえ！」

ナツの攻撃をまともに食らった俺はその場に膝をつき、思わず微笑を漏らす。

こいつ……前より確実に強くなってやがる。

俺も負けじと水星を放つ。

ナツは炎の滅竜魔道士だ。

水が相手じゃあ炎は出せねえだろ。

案の定、水星を食らったナツは水を飲んだのかゲホ、ゲホ、と少々咽る。

「これで、痛み分けだな？」

「……ッ上等！」

俺はどごぞの諜報部員のごとく脚に力を込め、何も無いところを横に蹴る。

すると、そこから真空の刃が生まれ、ナツに向かって飛んでいく。

ナツはそれを食らうまいと足から炎を発射させ、上に避ける。

そして空中から……

「火竜の……咆哮!!」

俺は腕をクロスさせ、それを防御するが、少しずつ、後ろに押されていく。

こりゃあヤバイかもしんねえな……

「火竜の……翼撃いい!!」

炎の中から現れたナツは両手に炎を纏わせ、薙ぎ払うように、腕を振るう。

ブレスだけで手一杯だった俺はナツの強烈な攻撃をもろに喰らった。

後ろに吹き飛ばされた俺は、全身に力が入らず、起き上がれなかった。

俺の負け……そう思ったが、その後すぐにナツもその場に倒れた。

「……畜生、せっかく勝ったのに……もう、魔力がねえ」

「レイドを倒すのに躍起になりすぎたんじゃろ？呆れた奴じゃ……」

マスターはそういつと溜め息をつきながら首を横に振る。

「おい……覚えてつか？」

「……何をだよ？」

俺がそう尋ねるとナツは嬉しそうにへへッ、と笑う。

「最初、俺達が勝負した時、俺、お前に負けたんだよな？」

……俺はああ、と簡単に答え、ナツの言葉を静かに聞く。

「でも……今回は俺が勝ったぞ」

「うるせえ」

そう話した俺達を皆は笑いながら見つめる。

そして俺達をギルドに運んだ後、皆で旨そうに酒を飲んだ……

喧嘩？いや、勝負だぜZ E・現在バージョン（後書き）

どうでしたか？ナツのキャラ・・・崩壊させてなきやいいのですが。

なんか何時の間にか、総合評価が32ptになってました。

お気に入り登録、評価して下さった方々、感謝感謝です

これからもよろしく願います

感想等、いつでもお待ちしております！

呪いの島（前書き）

何のひねりも無いタイトルではないですいません・・・

さて今回からしばらくガルナ島の話が続きます。

どうぞ御覧下さい。

呪いの島

今日の昼、仕事から帰って来た俺に昨晚ナツとルーシイが勝手にS級クエストに行ってしまったという知らせが来た。

「―事はリオン登場か……いいねえ、俺リオン好きなんだよ（ホモって訳じゃねえぞ）。

じゃあ俺もナツ達を追いかけますか……

幸いまだエルザも帰ってきてねえし。

今がチャンスだ！それに今 그레이がいねえって事は 그레이もあつちにいるんだな。

「しよがねえな……マスター！俺が止めに行くから少しの間待っててくれ！」

……もちろんこれは嘘だ。

俺としてはリオンを改心させたいし、何より 그레이と仲直りさせたい。

と、いう訳で、俺もS級行きますか！

「おいレイド……ちょっと待て」

ゲ、この声はエルザだ……帰って来てねえと思ったのに……まさか俺が嘘付いたのバレたのか？

「私も行く……あの馬鹿者達に仕置きをせねばな」

良かった……バテて無い、でもどうすっかな？エルザの目を盗んで先に行くのは間違いなく不可能だし……

「それに……お前がナツ達を助けたりしないように見張っておかねばな」

うっ、やっぱりバレてたか……

まあ逃げる方法は後で考えるとして、まずは港に向かわねえとな。

港に着き、俺達はどうやってガルナ島に向かおうか悩んでいる。

「よし！俺先に行ってナツ達を止めてくる！」

「おい、待て！」

ビュン！

俺はマツハを超える速さで飛ぶ。

そしてエルザから逃げ出した後、ガルナ島へ向かう。

位置はさっき町の人間に聞いてバッチリだ。

……海の上を飛んでいると、小さな船が真下を泳いでいた。

あれはもしかして……

「ウプ……気持ち悪……」

「おい！何で俺までついていかなきゃならねんだよ！」

「あい！さっきも言った通り、グレイが帰ると次はエルザが来るからだよ！」

「あゝ今更帰れないし……どうしよう」

やっぱりな……ボボが漕いでる舟だ。

俺はそつとその船に着地する。

「よ！お前ら！S級行くんだろ？俺も混ぜろよ」

皆は目を丸くして驚く。

「レ、レイド……何だ……連れ戻しに来たのか……無駄だ……ウプ、俺達は、帰らねえぞ……」

顔真っ青にしながら言っても説得力ねえぞ？

それに……

「人の話聞けよ、俺はS級に混ぜろって言ってんだ」

俺が再びそついうと全員驚きの声を上げる。

ま、当たり前だよな。

俺はナツ達に既にエルザが港に居る事を伝える。

ある者はより一層顔を真っ青にし、ある者はあーあ、と呆れ顔を浮かべ、またある者は恐怖のあまり号泣し……さあ、誰が誰だか当てて見よう。

「まあこうなつたらクエスト成功させるしかねえよな？」

俺は意地悪な顔でにやりと笑う。

ルーシイの顔色はもう青汁の様な色をしている。

あ、ナツもだった……理由は違うけどな。

そうこうしている内に船はガルナ島の近くまで来た。

すると津波が俺達の船を襲う。

原作ではグレイは体を縛られていて、魔法を使えず、船は乱暴に島に乗り上げた。

しかし今は俺がいる。

「俺に任せろ！アイスエッジ！」

俺が放った氷が海を瞬く間に凍らせる。

その瞬間、ボボは姿を消し、ナツ達を驚かせる。

「驚く暇あつたら島に上陸するぞ？じゃねえとエルザが来ちまう」

俺は極めて冷静に、全員に促し、さらにグレイの縄を解く。

「……ここまで来たら、もう戻れねえぞ？」

「わあつたよ……」

そうして、俺達は呪いの島、ガルナ島に足を踏み入れた。

呪いの島（後書き）

今回台詞が多めですね。

だらだらと喋ってしまい、話の内容を分かりにくさせたかも知れませんが。

僕の小説はどの程度の物なのか・・・その所を知りたいので感想等、よろしく願います。

デリオラの恐怖（前書き）

本日二回目の更新です。

早過ぎですかね？

とりあえず御覧あれ

デリオラの恐怖

ガルナ島……古来より悪魔達が住んでいるという、呪われた島。

もつとも、今は悪魔達は自分の事を人間だと思ってやがる。

どんだけ思い込み激しいんだよ……まあ、ムーンリップのせいであなっちまったんだから仕方ねえな。

そして今、島の長老に月を壊せ……って捲くし立てられてる。

今壊してやってもいいんだけどよ……リオンに会えなくなる可能性があるな……

俺が悩んでいると 그레이 が島の探索を提案する。

全員、その提案に賛成し、今日はこの村に泊まる事になった。

そこで、絶賛睡眠中の野獣^{ナツ}と変態^{グレイ}を外にほっぽりだすと俺とルーシィは朝までぐっすりと寝た（別に変な事はしてねえぞ？絶対だ）。

翌朝、俺とルーシィは野獣と変態を起こし、島の奥部へと向かう。

この島、案外小さくて、目的地が直ぐに見つかるんだよな。

ホラ、もう直ぐそこに遺跡……と、巨大鼠。

「ウワアアア！」

こっちくん！あの鼠野郎……戦えば勝つのは俺だろう。

でもな、あんなでかいのに追い掛けられると予想以上にびびるんだよ！

「アイスメイク……フロア！」

グレイが地面を凍らせて滑りやすくする。

「よし！今のうちに逃げましょ！」

「今の内にボコるんだ！」

俺達は鼠をフルボッコにした後、遺跡の中に入った。

中はどこか神聖な雰囲気……するわけねえな。

だって普通に人骨とか転がってんだもんよ。

それを触ったりするハッピーの気が知れない……うわあ、終いには
髑髏被ったりしてるよ……

どこの寂しがりやだ、お前は……

さて、俺達は遺跡の中を通過して地下にいる。

原作では床が壊れてそこから落ちたんだよな……

俺はその知識を生かし、皆に注意しながら進んだ。

その結果、今、俺達は氷付けのデリオラの前にいる、と言う訳だ。

それを見てグレイは驚愕の表情を浮かべる。

当然だろうな……自分の故郷を滅ぼした相手が目の前にいるんだからな。

俺達は何者かが何かを企んでいると見て、その場で待ち構える事にした。

もっとも、俺だけは奴等の正体を知ってるんだけどな。

すると、どこからかカッソ、カッソと足音が聞こえ、俺達は岩陰に隠れた。

「嘆かわしい事です……アンジェリカが何者かにやられました……

うわゝシエリーだ……生でみるとすっげえ格好だな……ルーシィが強烈に痛い奴っていうのも無理はねえよ。

奴等はしばらく会話をして、その後この場を立ち去った。

するとナツ、もしくはグレイがデリオラの上から光が差し込んでくる事に気が付いた。

……ムードリップ、始まったか。

俺達は急いで遺跡の最上階へ向かう。

そこで待っていたのはリオンとその部下達、デリオラに故郷を滅ぼされた者達だった……

デリオラの恐怖（後書き）

どうぞでしょうか。

僕の小説を御覧になった方、感想をくれると助かります。

呪いの真実（前書き）

今回文がちょっとアレです。

アレとはどういう意味かといわれると思いますが、頑張りま
したんでどうぞ読んで下され

ちなみにエルザ合流しました。

呪いの真実

さて、どうすっかな……俺は今、ある事に悩んでいる。

それはリオン、シェリー、ユウカ、トビー、ザルティの誰と戦うか、それに尽きる。

リオンは下手に関わると、オラシオンセイヌ戦に参加しない危険性がある。

シェリーは甘いといわれるかも知れないが、女とは戦いたくない。

後々良い奴になるなら尚更だ。

それは正体が女であるザルティも同様。

残るはユウカとトビー、よし、ナツと共同戦線と行くか。

つまりそれは原作とは違い、二対二で戦うという事だ。

「火竜の……鉄拳！」

まずはナツが先手を取り、ユウカ・スズキに攻撃する。

「つか奴って名前、日本人！？まあそんな事は置いて俺はトビーの相手をするでしょう。」

「ふっふっふ！俺のマヒ爪メガラゲ！能力は食らったの楽しみだ！」

「……マヒか」

「何故分かった!？」

俺はトビーに原作でナツが言っていた通りのツッコミをする、トビーは原作通りの反応をする。

……なんて面白い奴なんだ。

そんな君には新技、フレアボムをプレゼントだ!え?技名が在り来たり?大丈夫だ、これは某焰の大佐の奴を元にしたから威力が半端ねえ。

え?パクリ?……ほっとけ。

とりあえず、トビー目掛けて爆発を起こす。

逃げ惑う奴の姿は何とも滑稽だ。

俺がしばらくトビーを虐めていると、あちらではナツがユウカを倒したようだ。

ちよつと早くねえか?まあいいや、俺はトビーに止めを刺して、ナツと共に遺跡へ向かう。

しばらく走っていると、近くでシェリーと戦っていたルーシィが合流した。

ララバイの時といい、最近原作が崩れてきてるな…だって原作でル

ーシィとシェリーが戦ってた所って海岸だろ？今は遺跡の前だもんな。

俺達は遺跡に入る。するとグレイとリオン、二人がボロボロの状態
で戦っていた。

少し見守っているとリオンが倒れ、その後でグレイがリオンに説教
をする。

「片手での造形魔法はいざという時に力が出ねえ、これに懲りたら
基礎からやり直しな」

あれ？原作ってこうだったか？まあ、俺がいることで少しは狂いがあるかもだけど、狂い過ぎだろ！？たしか今頃原作ではデリオラの
前でナツがザルティと戦ってたんだよな？ってことはザルティ無傷
かよ、なんかむかつくな……

『グオオオオオ！！』

下から突然聞こえてきた地鳴りのような叫び声はデリオラだ。

俺はリオンを担いでデリオラの元へ向かう。

するとデリオラを封じたウルの氷が半分以上、溶け出している。

「ほっほっほ……私の勝ちですな」

いや、勝ち負けはどうでもいいけどデリオラは…待てよ？確かデリ

オラって…

『グオオオ！？』

ほら、何年も凍ってたから体とか崩れやすくなってる……

その姿を見たりオンは絶望し、声を出せないでいる。

やっと、リオンの発した言葉は「ま、まさか……俺のやってきた事は……」だった。

……空しい、空しすぎて敵だというのに哀れみすら覚えるよ。

俺達はリオンを連れ、遺跡の外へ出る。

そしてすっかり落ち着いたりオンを交え、紫色の月の事を考える。

三年間ムードリップを浴び続けていたリオン達には何の変化もない事、村人達が一番怪しい場所にいるリオン達に接触してこなかった事、それを総合して考えたら、いつの間にか合流したエルザは何かを思いついたように立ち上がった。

村に着いた俺達は村人に一つの質問をする。

何故故、遺跡の調査をしなかったのか？

村人たちの口から帰って来たのは調査しようにも遺跡に近寄ることが出来ない、という事実だった。

原作の知識がある俺は措いとして、これでエルザの推理にはパズルのように音を立てて最後のピースがはまった筈だ。

そう、村人達は元々全員悪魔で、ムーンドリップは人体では無く、記憶に問題が生じるということだった。

それが分かったエルザはナツと協力して、空に向け槍を放つ。

するとどうだろう。

月では無く、空に大量のヒビが入る。

間もなく、空を覆った紫色の膜が粉々に砕け、金色に輝く綺麗な月が顔を出した。

これが、ガルナ島を襲った呪いの真実だった。

その晩、記憶が戻った悪魔達と共に宴を開く。

悪魔達は、それは楽しそうに唄い、踊り、騒ぐ。

悪魔といっても、俺達人間とはなんら変わりは無かったんだ。

呪いの真実（後書き）

最後らへんちょっと文章がカッコつけすぎでしょうか？

書いてる間に感情移入してきちゃうんですよね（苦笑）
感想お待ちしています

あれ（前書き）

あれです。

あれ

悪魔達との宴の後、俺達はフェアリーテイルのギルドへ帰ろうと船に乗った。

船の上での会話がこれだ。

「ナツ、レイド、グレイにルーシィ、それとハッピー、今回の仕事は成功こそした物の、完全なルール違反だ。……？あれ？を覚悟して置くんだな」

エルザが俺達にそういうと、ルーシィを除く全員が顔を真っ青にする。

あ、ナツは元から真っ青だ、そこんとこ忘れんな。

「あれか……」

「あれだな……」

グレイと俺が交互に口を開く。

え？あれって何だって？……………今日はいい天気だ……………こんな日が続けば良いのになあ……………フフフ。

俺の様子を見たルーシィは「あれって何なのお！？」と一人パニックになる。

「あれは嫌だよ」

ハッピーが涙を流しながら言う。

「いつその事ここで溺れ死ぬか？いや駄目だ！生きていれば必ず良い事があるはずだ！」

「……そして俺達がギルドに着くと、なんとギルドは何者か（いや、俺は知ってるけど）の襲撃を受け、ボロボロになっていた。」

「幽鬼の支配者……あいつら良く正規ギルドでいられるよな……俺からしてみれば闇ギルドとなんも変わらねえぞ？」

「これで明日、レヴィ、ジェット、ドロイの三人が木に貼り付けに……」

「まあそんな事は俺がさせねえけどな。」

「マスターの話の後、ナツは怒りに怒って、暴れている。」

「大丈夫だ、明日辺りに奴らを潰せるからな。」

「今日の夜、俺は皆に内緒で街をぶらついている。」

「とはいっても、一定の距離を行ったり来たりを繰り返しているだけだ。」

「その一定の距離とは三人の家の辺りだ。」

あんまり頻繁にウロウロしていると俺が怪しまれるから、少し時間を置きながら、だけどな。

そうしていたら案の定、怪しい男が（言っておくが俺じゃない）レビィの家の前を駆けている。

……遠目ではあまり良く見えないが、恐らくあれは鉄竜クロガネのガジルだ。

原作では、ガジルは俺の好きなキャラの一人だった。

意外と仲間思いで、面白い所もあるキャラだからだ。

だがそれは改心後の話、今のガジルは？悪？だ。

妖精の尻尾に齒向かうなら徹底的に叩きのめす！

「ギヒヒヒヒ……まずは一人目だ」

ガジルらしき男がレビィの家に窓から侵入しようとした所を俺が雷の矢で打ち落とす。

「ぐっ！なんだテメエは！？」

「俺か？俺は妖精の尻尾の魔道士……レイドだ！」

あれ（後書き）

ガルナ島より帰還しました。

ファントムロードとのギルド抗争始まりました。

鉄屑野郎（前書き）

今回は前回に引き続きオリジナルエピソードです

鉄屑野郎

俺とガジルの戦闘前、ガジルは俺をこう呼んだ。

？鬼神のレイド？と……なにそれ、全然嬉しくない。

鬼神って何だよ鬼神って！たしかに敵には情け無しで、雑魚にも強力な魔法を放つたり、

カゲヤマにチンピラみたいに怒鳴ったりして来たけど……鬼神って呼ばれる筋合いは一切ねえ！

「スパークアロー！」

俺は怒りに任せて雷の矢を放つ。

ガジルは鉄の滅竜魔道士だ。

狙って撃たなくても相手は鉄、つまりガジルはどれだけ逃げてても雷が追跡してくるって寸法だ。

「ちい！鉄竜剣！」

ガジルは腕を剣に変えて矢を打ち落とそうとするが、その鉄を通してガジルは感電する。

「馬鹿……自分の魔法の性質ぐらい知っておけ」

……後に妖精の尻尾の魔道士になるんなら尚更な。

「黙りやがれ！鉄竜の……咆哮！」

ガジルは口を大きく開け、鉄屑が混ざった竜巻を吹いた。

俺は避けようとするが、間に合わず、右腕が使い物にならなくなった。

これで俺の魔法の威力は半減するだろう。

「ギヒヒヒヒ！少々予定が狂ったが、奴等の変わりにお前を見せしめにしてやる！」

ガジルが俺に止めを刺そうとした時、ガジルに向かって魔法を放つものがいた。

ナツだ……

「俺の仲間は何してんだコラアア！！」

気付いたら周りには、妖精の尻尾の皆がいて、ガジルを取り囲んでいた。

「幽鬼の支配者の魔道士よ……ジョゼの野郎に伝えておけえ！妖精の尻尾がお主らを潰す、とな！！ガキの血を見て黙ってる親はいねえんだよ！」

原作とは状況が少し違うが、マスターはそう凄む。

ギルドの皆は一斉に魔法を放つが、ガジルは高く飛び、街の外へと

逃げる。

「ギヒヒヒ！楽しくなってきやがった！」

ガジルはそういうと何処かへと去っていった。

そしてマスターが俺に駆け寄り、大丈夫か？と、言う。

そして俺の耳元で「後で少し話があるからワシの部屋に來い」と呟く。

俺には、何の話検討もつかなかった……

鉄屑野郎（後書き）

次回はマスターとレイドの大事な話です。

転生者レイド（前書き）

今回はレイドにとって結構重要な話をマカロフとします。

二次創作の転生物で、これをやっている方は少ないんじゃないかなと思います。

そうでもありませんか？

転生者レイド

俺は今マスターに呼ばれ、マスターの自室にいる。

マスターは茶を二つ、机に置き、俺の向かいに座る。

「さて、単刀直入に聞く、お前さんはどこまで知っておる？」

え……

俺の頬に冷や汗が伝う。

マスターの表情は怒っている様子も無く、かと言っていつも通りのおちやらかした様子も無い。

その目は真剣に、逃さないように俺の目を捉えていた。

「お前さんはガルナ島に行く時といい、先ほどの戦闘といい、最初から何かを知っているように見える……まあ話したくないなら無理には言わんがの……」

ここではぐらかしてもマスターは何の問題も無く、いつも通り接してくるだろう。

しかし話せば、全てを知っている者として、そういう目で見られるかもしれない。

まあこの人に限ってそれは無いだろうとは思う。

でも俺は言つべきだと思つた。

それで少しでもギルドへの不幸な出来事が少なくなるなら、と。

「実は俺……別の世界から来た人間なんです」

俺が一言そういうと、マスターは一瞬、驚いた顔をする。

だが直ぐに表情を戻し、「どういうことじゃ?」と尋ねる。

俺は自分のことを全て話した。

以前俺がいた世界では、この世界の話が本になっていた事、俺は以前の世界で死に、その後この世界に来たこと、その全てをマスターは黙って聞き、静かに頷いた。

「大変じゃつたのうレイド……全てを一人で抱えるのは大変じゃつたろうに」

「信じて……くれるんですか?」

マスターはフム、頷くとヒゲを指で弄る。

「子を信じたらん親なぞいやせんよ」

その言葉を聞いた俺は黙って俯き、この世界に来て良かった、と小声で洩らした。

この知識をマスターのう役に立てようと心に決めた。

そして俺はこれから起こる不幸の一部をマスターに話した。

そう、ギルドのメンバーが幽鬼の支配者に殴りこみにいつている間にルーシィが攫われる、という事実を……

転生者レイド（後書き）

戦闘の前夜…みたいな感じでした。

シリアスな感じを出せれてるといいのですが…

感想お待ちしています

戦争（前書き）

今回ちょっとグダグダかもしれません

戦争

さてさて、今俺はというと、マスター達と共に幽鬼の支配者へ、殴り込みに来ている。

え？ルーシイはどうした？レビィ達の看病はミラがやってる。

つまりルーシイも今ここに来ている、という事だ。

余計に危ないじゃないか、と言われるかもしれないが、これは本人の希望だ。

何もせずに一人で隠れてるのは嫌だ、つてな。

まあ近くにナツやグレイがいるから大丈夫だと思う。

おや？マスターが二階に行くようだ。

俺もついて行く事にしよう。

大空のエリア……？だっけか？あいつが何処かに隠れてやがるからな。

ジョゼの野郎のビジョンがマスターに話しかけて来る。

あの野郎……気安く話しかけんじゃねえよ。

今すぐにもぶっ飛ばしてやりてえが多分今の俺には無理だろうな。

正直悔しいが……それをやるのはエルザやマスターの役目だ。

ルーシィが攫われて無いせいで、マスターは然程怒ってはいない。

その為、冷静で、後ろから迫るアリアにも気付いている。

そしてアリアがマスターに魔法を使おうとした時、マスターは無言でジャイアントの魔法でアリアを叩き潰した。

俺とマスターは他に誰か隠れていないかを確認した後、皆が戦っている一階に戻る。

するとナツとガジルが戦っており、他の幽鬼の支配者のメンバーはそこら中に倒れている。

マスターが倒れなかった事もあるだろう。

圧倒的に俺達は有利だった。

ガジルは特大の鉄竜の咆哮ぶちかました後、建物の天井突き抜け、何処かへと逃げて行った。

一先ず第一Rはこちらの勝ちだ。

戦争（後書き）

さて、これで二つ、原作での被害・・・みたいな物を事前に食い止めました。

一つはルーシィの誘拐、二つめはマスターの敗北です。

これについてご意見などがある方は感想とか送ってください

超魔導巨人ファントムMKIEI(前書き)

今回少し短めです。

超魔導巨人ファントムMKII

ファントムロードのギルドでエレメント4とガジル以外の奴らを倒した後、俺達はギルドで話し合いをしていた。

これからどう攻めるのか、或いは攻め込んでくるのか、みたいな感じに。

とりあえず相手の狙いはルーシイだ。

だからルーシイの周りには二、三人魔道士を置いてこう、って話になった。

するとその時、外から何かの足音みたいなのが聞こえて来た。

幽鬼の支配者の移動要塞だ。

『おい、妖精の尻尾の魔道士共！大人しくルーシイを渡せ！』

んなこと言われても断るに決まってるんだろ、ルーシイは俺達の仲間だからな。

皆が移動要塞の中から喋りかけてくるジョゼに向かって野次を飛ばす。

それを聞いたジョゼは移動要塞、もとい超魔導巨人ファントムMKIIの大砲から容赦無く、禁忌魔法アビスブレイクを放った。

『素直にいう事を聞かないからこうなるのだ！後悔しろ！』

アビスブレイクが迫ってくる中、俺とエルザが前に立つ。

『何だ！死にたいのか！』

「換装！金剛の鎧！」

エルザが防御力を上げる鎧に換装した後、俺は名前は無いが、仲間の防御力を上げる魔法を使った。

その結果、多エルザも多少は怪我したものの、殆ど無傷だ。

さて、反撃開始といきますか。

俺達は超魔導巨人ファントムMKIIの中に乗り込んだ後、一人ずつ分かれて行動する。

俺とナツとエルフマン、そしてグレイ。

それぞれ四方向に分かれた俺達、頭数ではエレメント4と同じだ。

俺の相手は……

「お前か……大空のARIA」

「悲しい……」

超魔導巨人ファントムMKIEI（後書き）

さて、原作通り、エルフマンはソル、グレイはジュビア、ナツは既に兎兎丸を倒しました。

なのでレイドの相手はアリアにしよう！と、考え方が単純ですねハイ。

感想お待ちしております

ドレイン(前書き)

さいきん何だか文が雑になってる気がします。

言い訳 暑さで能がボタンQ

ドレイン

俺は今幽鬼の支配者のエレメント4の頂点、大空のエリアと戦闘を行っている。

奴の魔法はドレイン、相手の魔力を吸い取る魔法だ。

「空域・絶！……悲しい！これでまた一人、有能な魔道士が倒れてしまった！悲しい〜！！」

「悲しいと思うんならやるんじゃねえよ」

俺は奴の技が発動する前に空域から遠ざかり、奴の技を回避する。

しかし……奴の魔法は厄介だ。

あいつに近寄らずに攻撃するしかねえ……

「サード・インパクト！」

これはファースト、セカンド、サード、と威力を上げる事が出来る魔法だ。

もちろん、威力を上げれば上げるだけ、俺に返ってくる反動も強い。

今はフィフス辺りが限界だ。

因みに、だが奴の魔法は厄介極まりない、厄介だが単純でもある。

一つの技の強化版しかないのなら、まだ対処法はある。

「スパイラル・アイス！」

回転を加えた氷の矢、これは魔力により、強度を上げている為、ちよつとやそつとじゃ壊れない。

しかも、遠隔操作可能だからな、だから奴がいくら逃げても俺が見失わない限り、奴は逃げ惑うしかない。

「!?!」

しかいし奴の姿が突如として消え、俺は思わず魔法を止めた。

そうだったな、確か奴は姿を消す魔法を使えたはずだ。

でも……

「そこだ！」

こういう時、奴の様な三流なら背後から狙ってくる事は、分かりきっている。

原作でも、ジョゼを倒したマスターを背後から狙ったが、一瞬で玉砕されたからな。

俺はそれと同じように、攻撃力強化の魔法を使って奴を殴り飛ばす。

……あーあ、こりゃしばらく起きねえな。

さて、勝てるかどうか分かんねえけど、ジヨゼの所に行きますかね
……

終戦（前書き）

すごく強引ですが、これで妖精の話が終わらせて頂きます

終戦

俺はジヨゼの部屋に向かう途中で、エルザと合流した。

アビスブレイクの件然り、俺とアリアが戦った件しかり、エルザは殆ど無傷で移動要塞・超魔道巨人ファントムMKIIに乗り込んでいた。

今頃ナツはガジルと戦っているだろうし、エルフマンは完全なテイクオーバーを習得し、

グレイはジュビアに……あいつ死ねばいいのにな。

さて、ジヨゼの部屋の前に俺達は到着した。

互いに頷き合い、俺は乱暴に部屋のドアを蹴り破る。

中にはやはりジヨゼがいて、奴は後ろで手を組んで、俺達に話しかけてきた。

「……ここまで来た事は褒めてやろう、だが、ここで終わりだ！」

ジヨゼは手先から黒い波動をこちらに飛ばしてきた。

もちろん、そんな単純な技を食らうはずも無く、エルザがそれを切り裂き、俺が巨大な雷の球をジヨゼに向けて飛ばす。

「デッドウェイブ……！」

ジヨゼは先ほどと同じ魔法で俺の技を打ち消す。

そればかりか、雷の中を突き抜けて、俺に奴の魔法が当たる。

「大丈夫か！レイド！」

「ああ、やっぱりあいつ強いな……でも、うちのマスターよりはずつと格下だ」

俺の言葉にジヨゼが眉をピクン、と動かしたが、そのまま黙って聞いている。

「あいつの魔法には重みが無い、あいつはマスターの器じゃねえ！」

「ほざけ！どんなに喚こうと、ルーシィ・ハートフィリアは私達が捕らえ、他の魔道士は全員潰すのだ！」

ジヨゼがそう吠えた瞬間、俺とエルザにとって、覚えのある、あの大魔道士の魔力が感じられた。

俺達の父親、マスター・マカロフだ。

マスターとジヨゼの攻防戦がしばらく続き、マスターはジヨゼに向かって、何かを喋りかける。

生憎、俺達は今遠くで二人の戦いを見ていて、会話は聞こえてこない。

それから数秒たった後、眩い光が広範囲を包み、それが病んだ瞬間にはジョゼは倒れていた。

俺達は勝ったんだ。

そう思うと、嬉しくも切ない気持ちになった。

だってこの戦いはルーシイの父親が巻き起こし戦いだ。

そう思うと、喜ぶ気持ちにはなれなかった。

でも、終わったんだ。

俺はあのギルドにこれからも世話になるだろう。

だから誓う。

妖精の尻尾にどんな脅威が襲おうとも、俺は戦い続ける。

だってあそこは俺達の家だから……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4704v/>

妖精の話

2011年9月15日15時35分発行